

めり、障出るの義鳥にいふ辭也、公治長はいざ去らず、鳥語はさはりて通じがたければいへり、日本紀に、韓語をからさへづりとよみ、源氏に、海人の物いふを聞えらぬ事さへづりてと書り、今も聞分がたき人の言ばを、さへづるといふめり、侏儻缺舌の意なり、萬葉集に、言さへぐとも、韓ことさへぐとも見えたるこれなり、

〔本朝月令 六月〕朔日内膳司供忌火御飯事

高橋氏文云、挂畏卷向日代宮御宇大足彦忍代別天皇行 五十三年癸亥冬十月、到于上總國安房

浮島宮略 此時太后詔警鹿六獺命、此浦聞異鳥之音、其鳴駕我久々欲見其形略 下

〔萬葉集十四東歌〕相聞

筑波禰爾フツハチ、可加奈久カカナク、和之能禰ワシノネ、乃未乎ノミハ、可奈岐カナキ、和多里ワタリ、南牟安布ナムムアブ、登波奈思爾トナシニ

右常陸國歌

〔古今和歌集春〕題しらす

も、ちどりさえづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

よみびとしらす

〔輶軒小録〕禽言之事

釣舟格磔、喚起、盍且、泥滑々、浦餅焦、不如歸去、鳳凰、不如、我如、き鳥の聲、人言に片どること多し、依之、四禽言、五禽言の詩あり、明の張祥鸞が詩和禽言成、樂府、寛裁、荷葉製衣裳と群芳譜にこれを載す、日本にも、高野山に佛法僧と鳴く鳥ありと云ふ、亦日光にて慈悲心となく鳥ありと云ふこと、昔より和歌に詠じ、人々傳誦することあり、是も唐にもあり、百川學海中蜀都襍抄に、峨眉山に佛光といひて、時に依りて光の現することあり、其前に鳥あり、施主發心菩薩來到と呼ぶ、光のあとに、施主不施菩薩去了と呼ぶに似たり、亦云、鳥聲只三字佛現了と云ふ、雀に似て、只三枚有りとなり、此等のこと合せ案すべし略 下